

博麗の兄

エンゼ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

兄妹喧嘩をしながら幻想郷（主に博麗神社）に被害を与え、紫さんに胃薬を大量消費させるお話。

目次

おまけ

ガチ喧嘩日和 Happy Halloween | 1

ガチ喧嘩日和 Merry Christmas | 3

本編

喧嘩一回目 | 6

喧嘩二回目 | 11

喧嘩三回目 | 14

喧嘩四回目 | 17

喧嘩五回目 | 22

喧嘩六回目 | 26

喧嘩七回目 | 30

喧嘩八回目 | 33

喧嘩九回目 | 39

喧嘩十回目 | 43

喧嘩十一回目 | 46

喧嘩十二回目 | 48

喧嘩十三回目 | 52

喧嘩十四回目 | 56

喧嘩十五回目 | 63

おまけ

ガチ喧嘩日和 Happy Halloween

『ハロウィン』。それは昔、どこかの民族のやったサウィン祭が起源とされてる祭りである。収穫に関する祭りであったらしいのだが、どういうわけか……どういうわけかいつの間にか子供が仮装して大人からお菓子を貰う祭りになってしまったのである。

別に忘れ去られたわけではないが、そのハロウィンもどこからか幻想郷に入ってきて少なからず浸透している。主に人里の子供達や精神が幼い妖精等によって。

そんなハロウィン当日。博麗神社には二人の人影があつた。言わずもがな、一人は当代博麗の巫女の霊夢。もう一人はその兄の霊華だ。まあ、ここで暮らしているから当たり前なのである。

いつもの違ふところは、霊夢が何故かどこかの大食いの亡霊の格好をしているという点……だろうか。

「……………」

「……………」

さらに言うなら場所は神社の外と中を区切る障子。中にその格好をした霊夢。外には仕事を終えて帰ってきてきて障子を開け今にも部屋に入ろうとしていた霊華。両者は……というか霊華は暫く霊夢の格好を見て絶句してしまっていた。

——数秒後、霊夢は己の兄に対してハロウィンには欠かせないあの言葉を紡ぐ。

「デッドオアトリート。お菓子くれなきや殺すわよ」

「いや、それはおかしい」



「何よ!!何なのよこれ!!」

「いやよく考えろよ愚妹!まずなんだよ『デッドオアトリート』って!!怖すぎだろうが!!そんな挨拶だったら大人が意地でもハロウィンなんか流行らせんわ!!」

「…………… そっちはいいとしてこっちよ!!なんであんた『つぶ餡饅頭』を買ってきたわけ!?私がこし餡派なのは知ってるでしょうが!!」
「はあ!?!俺が自分の金で何買おうが俺の勝手じゃねえか!!しかもこれ俺が自分のために買ったやつだぞ!!お前が勝手に横取りしといて文句言うんじゃねえ!!」

「ごんの馬鹿兄貴!!今日はハロウィンなのよ!?!この可愛い妹のためにお菓子の一つくらい用意出来ないの!?!」

「働かざるもの食うべからずって知ってるか?」

「…………… 上等」

「お、やるか?… ってか、今更だがお前はどっちかって言えば与える立場だろ?」

「うるさいわね、私はまだ子供よ!只でお菓子が貰えるなら喜んで子供にでもなつてやるわ!!」

「都合のいいときに子供になるなよオイ!!… あ、そーいやお前まだピーマン苦手だったな… 確かにまだ『ガキ』だな。里の子供たちより全然幼い『ガキ』だ」

「…………… いい度胸してるじゃない」

「来いよ、れーいーむちちゃん♪」

「…………… 殺すっ!!」

「はっ、やれるならやってみろってんだ!!」

その日、その月最後の神社倒壊が成されたことは言うまでもない。ついでにまた、八雲家に永琳製のかなり効くとされる胃薬が大量に届いたことも添えておこうか。

ガチ喧嘩日和 Merry Christmas

季節は冬。どこぞの秋姉妹が名残惜しそうに去っていき雪女が活動を始めていく時期になった。幻想郷では雪に包まれていき人々が活動するには適しない状態となっているのだが……人里では子供を中心とした盛り上がりを見せていた。

原因としてはクリスマスだろう。クリスマスというのは元々外の世界のキリスト教と呼ばれる宗教の教祖である『イエス・キリスト』の復活祭であったらしいのだが……いつの間にかサンタクロースという存在がその年いい子にしていた子供にプレゼントをくれるという行事に変わってしまった。いやはや、謎である。

さて舞台はいつもの博麗神社——ではなく、人里から少し離れた位置で経営されている居酒屋的存在、『八目鰻』の看板がある屋台。そこに霊華は一人お酒を飲んでほろ酔いとする、というのを繰り返していた。

「……なあ店主さん、俺はどうすりゃいいんだろうな？」

「うーん……難しいですねえ……」

霊華が店主さんと呼んでいるのは『ミスティア・ローレライ』。彼女は本来人間を驚かせる性格の妖怪ではあるのだが……この屋台を経営してるときは別。性格は打って変わり女将のようなものに。

出してくれる料理は美味しいものの、彼女が時折サービスで歌ってくれる歌で客が狂ってしまうことがあるので少し注意が必要である。なお彼女はそれを自覚はあまりしてないので尚更だ。

「……妹さんにバラしてしまうのは？」

「いや、それは色々と不味いんだ……」

「ですよねえ……」

今霊華が悩んでいることは博麗にとっては死活問題。賽銭が足りなくて生活が危ういとか、つぶ餡こし餡戦争とか……それよりも非常に難しいデリケートな問題なのだ。

「どうすれば……あいつにサンタクロースの正体がバレずにプレゼント

トを置けるのか…!!!」

———デリケートな、問題なのだ。ほらそこ、宗教違うじゃねーかとか幻想郷にサンタクロースとかいるわけないやんとか言わない!

「去年はどうしてたんです?」

「そこはほら、紫に頼んで無理やり眠らせてな」

「今年はそれ無理なんですか?」

「いやな…なんかあいつ無駄に勘が鋭いからな。一昨年なんかは昨夜に頼んだりとかして凌ぎきつてたんだよ。年々方法を変えてるわけだが…そろそろ誤魔化せなくなってきたな…」

「あー…」

「いやな、一回それで喧嘩したことあるんだ。そのときは割とヤバかったなあ…」

○○○

『馬鹿兄貴!!サンタってやつと知り合いなんでしょ!!』

『……確かにそうだが?』

『早く会わせなさい!今度こそ正体暴いてやるわ!』

『それは無理だな。あの人はあの人で忙しいんだからな…どうしてもって言うなら俺を倒してみることだな』

『… やってやろうじゃない』

○○○

「そのときのあいっつって言ったたら…なんで異変のときにその力発揮しないのか不思議なくらいだぞ…」

「あはは…(霊夢さんのことだ。もうその程度のこと気付いてるはずなのに…演じてるのかな?それとも…)」

愚痴を聞きながら軽く思考するミスティア。その問いに答えるものは、誰もいなかった。

○ ○

「なあ霊夢。今年もか？」

「何がよ」

「サンタさんについてさ。もうお前は気付いているはずだろ？」

「… まあね。流石に気付くか」

「お前の兄貴、まだお前が信じてると思ってるぜ？もう気付いてるって言ったらどうだ？」

「嫌よ。だって馬鹿兄貴の——… いや、なんでもないわ」

「え、なんだよ。言いかけて止めるのは無しだぜ？」

「とにかく！嫌なもんは嫌なのよ！」

「気になるじゃないか。ほれ、親友の馴染みでこの魔理沙様に聞かせてみるよ？」

「… それ以上言うならその口縫い合わせるわよ？」

「わ、悪かったって…」

本編

喧嘩一回目

ドツゴオオオン
!!!!

とある朝。何かが爆発したようではないか、という音が幻想郷中に響いた。

普通ならば、こんな音が響いた瞬間に人々や妖怪はその音の原因に恐れを抱く、もしくは興味を持つだろう。

しかし彼らは「またか…。」というような顔つきでその音の発生所の『博麗神社』のある方角を見つめていた。

同時刻、魔法の森に住む自称普通の魔法使い『霧雨魔理沙』も同じく「またか…。」という顔つきをしていた。

「全くあいつらは…。」

魔理沙は愛用している箒に乗って空へ飛ぶ。

向かう場所は決まっている。

「私が止めてやらないと… 神社が壊れるまで続けるからなあ…。」

本日初のため息をつく。

おそらく、これからも沢山つくのだろう… と思いつながらその場所へ向かう。

博麗神社には二人の人間が住んでいる。

一人目は、今代博麗の巫女を勤めている『博麗霊夢』。基本的に面倒くさがり屋で、家事などはほぼしていない。異変が起こったときに、解決する立場にいるのにも関わらず催促されるまで動かない、そんな

人間だ。

だが、彼女は天才だ。霊力を操ったり結界を張ったりすることは、歴代博麗の巫女の中でもトップクラスだろう。一度彼女が本気を出せば大抵のことは解決できる。まあ、本気を出せば、の話だが。

二人目は、そんな霊夢の2歳年上の兄である『博麗霊華』だ。女のような名前ではあるのだが、れっきとした男だ。本人はあまり気にしてはないようだが。

性格は霊夢よりは真面目だ。霊夢が家事をしないので、家事は全て霊華が引き受けている。まあ、面倒くさがり屋な部分が8割ではあるが。

ただし、霊華には霊夢のように灵力や結界の才能は無い。なので、先代の博麗巫女から直伝で武術を教えてもらった。今は亡き先代の武術の後継者なので、わりかし幻想郷でやっていける実力を持っている。

そんな二人なのだが、とてつもなく仲が悪い。大体週に10〜100回の頻度で喧嘩をしているのだ。

それにより幻想郷にそれなりに被害を出しており、管理者を立場にある『八雲紫』が胃薬を常備するようになったのは有名な話。

博麗神社に到着した魔理沙は、とりあえず神社の居間へ行く。

そこには……お祓い棒とお札を装備して霊華を睨み付けてる霊夢と、何か強そうなオーラのものを纏って、拳を構えながら霊夢を睨み付ける霊華がいた。

所々見ると、居間の机が粉碎されており、さらには壁や床はヒビがあっていた。これで神社が倒壊しないのが本当に謎だっというレベルになっている。

「はあ……今日は何があったんだ？朝飯に梅干しでも入ってたのか？賽銭の取り合いか？それともあれか、目玉焼きには塩か醤油かまた揉めたのか？」

これらが理由で一度喧嘩をしている。またこれらが原因なのでは

無いか、と呆れながら魔理沙は問いた。

「!ちよつと聞いてよ魔理沙!!」

魔理沙を見つけた霊夢が言い寄る。魔理沙は軽く面倒くさくなりながらも話を聞く。

「馬鹿兄貴ったら、あんこはつぶ餡の方がいいって言うのよ!!可笑しいわよね!?絶対こし餡の方がいいに決まってるわ!!」

… 絶句した。魔理沙は口をあんどりと開けたまま、固まってしまった。

「おい霊夢、それは聞き捨てならないなあ?絶対につぶ餡の方がいいに決まってるだろ!何故こし餡に拘る!!」

「つぶ餡のあの食感の何がいいのかしら!!皮が口に残るあの感覚は嫌いよ!!」

「あの食感がいいんだろ!!こし餡は甘すぎる!!よくあんなもの食べられるな!!」

「あの甘さがいんじゃない!!この分からず屋!!」

「なんだとこの脇見せ巫女!!」

「脳筋!!」

「ナマケモノ!!」

… ああ、今日も空は綺麗だな、と魔理沙は現実逃避をしながらこの一連の会話を聞いていた。それと同時に、思ってしまった。そして、口に出してしまったのだ。

「はあ… しょうもないぜ…」

「… は?」

「あ」

呟いたのに気付いたときにはもう遅い。二人が言い合いを中断して、魔理沙を睨み付けていた。その視線で大抵の妖怪が凍りつくだろうな、と魔理沙は内心思っていた。

「… 霊夢」

「ええ… 一時休戦ね」

霊夢はお祓い棒と札を改めて構え直し、霊華はポキポキと手を鳴らし始めた。

「ちよ、ちよつと用事を思い出したからここでおいとまするぜ!!」

自分がこれからされることを感じ取ったのか、魔理沙は自分の箒に乗って最高速で神社から逃げようとする… が、

「はああ!!」

「!？」

突然自分の体が動かなくなる。良く見ると結界で体が固定されているのが分かった。

「行きなさい馬鹿兄貴!!」

「良くやった駄目妹!!」

魔理沙のほうへジャンプして接近してくる霊華。そして… 魔理沙がボコられる瞬間、

「なんでこんな時だけ息ぴったりなんだよおおお!!!」

魔理沙の断末魔が幻想郷中に響き渡った。



朝の騒動の後、霊夢と霊華は正座させられていた。

二人の目の前には、妖怪の賢者である八雲紫がいる。そして二人の背後には… 倒壊した博麗神社があった。

「ねえ… なんで私が正座させたか分かるかしら？」

「…」

「…これで何度目なの!?神社倒壊させるの!!」

「ゆ、紫様!落ち着いてください!!」

「落ち着けると思うのこれで!?今月でもう10回目よ!?まだ今月に入って一週間も経ってないのに!!」

紫の式である『八雲藍』が落ち着かせようと試みるが、紫が落ち着く気配はない。

「どうしてあなた達は…なんでよ!!」

「…なあ霊夢、これ俺達が悪いのか?」

「私は悪くないわ。私は」

「…は?だったら俺が悪いとでもいうのかよ?」

「そうよ?だって最終的に神社を壊したの馬鹿兄貴じゃない。魔理沙をボコった時の衝撃波で」

「上等だ構えろ」

「こつちまで巻き添え喰らって迷惑してたのよ。退治してやるわ」

「や・め・な・さ・い!!」

肩で息をし出した紫に、霊夢と霊華は不思議そうに言う。

「紫…どうしたの?そんなに疲れて」

「さっさと休んだほうがいいんじゃないのか?」

「誰のせいよ!!」

流れる動作で胃薬を飲む紫。それと同時に藍は頭痛薬も渡す。

「紫様…あの二人の喧嘩を止めるのは不可能かと…」

「ええ…でも、でもよ?限度があるじゃない!!やり過ぎよ!!」

紫は文句を言いながら神社を修復していく。霊夢と霊華もいがみ合いながら修復をし始めた。

「はあ…静かな朝を迎えられる日は来るのだろうか…」

藍はそう呟いて、紫の手伝いをしに行った。

これは、そんな博麗兄妹の物語である。

喧嘩二回目

俺は『博麗霊華』。そう…あのぐーたら駄目巫女の霊夢の兄だ。
今俺は人里に買い物に来ている。ある程度買いだめをするためだ。
あ、今日は野菜が安い。

実を言うとな…博麗神社の生活費は俺が稼いでるんだ。あそこ
は参拝客なんかほとんど来ないしな…なんで来ないのか全くもつ
て謎だ。

にしても里はいい。

人々がお互いを助け合って生きていくのを実感出来るか
らだ。特に、子供が楽しそうにしているのは嬉しいな…幼い霊夢を思
い出す。あの頃はまだ可愛かったぞ。ホントにどうしてあーなつた
のか…

「…博麗の…」

ふと、誰かが呟いたのが聞こえた。その顔は、明らかに歪めている。

まあ…いつものことだ。博麗の巫女と、それに関連する人物は嫌
悪される…それはもう定めだ、って俺は割りきってはいるが…い
かんせん霊夢がなあ…どうでもいいっていう態度はとってはいる
が、強がりだろうな。だからって俺は何もしない。面倒だし…こう
いうのはあいつ自身がなんとか割り切るしかないんだからな。お、卵
も安いな。

俺が買い出しを続けていると…

「やあ、霊華じゃないか！今日も買い出しか？」

…えつと…名前が出てこない…あ！

「けーねか!？」

「…お前は自分の雇い主の名前を忘れるのか…」

はあ…とため息をつくのは…確か『上白沢慧音』のはず。俺の
雇い主つてことになってた。

こいつは寺子屋で教師をやっている。俺はその寺子屋の子供達に
軽い護身術を週に1回のペースで教えてるってわけだ。ちなみに弱
小妖怪程度なら追い払えるレベルのやつだ。

でもこいつにはあんまり会わないから名前忘れちゃうんだよな…
それに給料渡してくるのもあいつの友人っぽい妹紅つてやつだし。

「それで、雇い主様はこんなところで何をしてるんだ？今日は寺子屋
じゃないのか？」

「ああ、近頃人食い妖怪が出没してるものでな、早めに帰らせたんだ」
「… 人食い妖怪？」

「被害があつたのは暗くなった頃だ。結構な騒ぎになったんだが、知
らないか？」

「へえ… 知らないな。目撃情報とかないのか？」

「残念ながらな… だからこうして被害がこれ以上でないよう私がパ
トロールしてるわけだ」

「それはご苦労なこつた。ま、ヤバくなったら霊夢が動くだろ」

「… お前は動かないのか？」

少し睨みを入れながら俺を見てくる。被害が出てるのに動かない
のかこの薄情者め、とでも思われてるんだろうなあ… 別にいいが。

「俺の仕事じゃないし… 俺が出るまでもないだろ？」

「… 私としては出てもらえると助かるのだが」

「考えてはおくさ。ほら、早くパトロールに戻ったほうがいいんじゃないか？人里の守護者さん？」

「…」

「そんじゃ、買い出しも終わったし帰るか。一応、お前も気を付けろよ
」

手を振ってけーねと別れる。

さて… 今日は何を作ろうか。ピーマンが手に入ったし、ピーマン
の肉詰めでもしてみるか。

あいつピーマン食べないしな。今日は徹底的にピーマン尽くしだ。
意地でも食わせてやる。



「こおんの馬鹿兄貴!!何よこの夕御飯は!!」

「何ってピーマン尽くしだが?ピーマンの肉詰め、ピーマンご飯、ピーマン風味の汁...最高じゃないか!!」

「... あんた私がピーマン苦手なの知ってるわよね?」

「当然、だから食べ!」

「... 殺す」

「上等だ、夕飯が冷えない内に片付けてやる」

「あーもう!喧嘩するなら外でやるんだぜ!!」

喧嘩三回目

「馬鹿兄貴、ちょっと出掛けてくるから」
ピーマン尽くしの夜ご飯の翌日の朝、霊夢からこんな事を告げられた。

…は？

マジで？

あのいつつつつつも神社でぐーたらしてるあのナマケモノ巫女の霊夢が？

まともに動かないで一日を過ごすのが当たり前のあの霊夢が？

お祓い棒とある程度の札を持って出掛けてくるだとおお!?

「…明日は槍でも降りそうだな」

「馬鹿兄貴が私に対して抱いてるイメージがよおく分かったわ。例の妖怪を退治する前にあんたを退治したげる」

「それは返り討ちにしてやるからいいとして… 珍しいな？お前から動き出すなんて」

霊夢はその性格から、何かあっても自分から動くことは基本無い。誰かに催促されるか、無理矢理やらされる時ぐらいだ。

自分で動くときもあるが… その時は自分のための時だけだ。

「まあ… 頼まれたし。お礼もかなりくれるっていうしね」

「ちなみにそのお礼ってのは？」

「米二、三年分」

「よおし霊夢よ、何がなんでも退治してこい」

米二、三年分だ?!?それがあれば… ムフフ、ある程度贅沢出来るな。
米があれば生きてはいける。

米 is power. 米 is justice. 米 i

s God.

これは我が博麗神社に伝わる教えだ。ホントにその通りだと思う。いやマジで。

「それに、スペルカードルールを広めるのに割といい機会だって紫が言ってたし」

・・・ あー、それもあるかもな。

ースペルカードルール。

これは近年、紫と霊夢によつて作り出された新たな幻想郷での決闘方法だ。

以前までの・・・つまり、師匠の時代までの博麗の巫女はガチの妖怪との死闘を繰り返していったらしい。あ、師匠ってのは先代巫女のことだぞ。

それによつてなのかは分からないが、博麗の巫女に就任してる期間が極端に短くなったりすることがあったみたいだ。師匠は・・・紫曰く、歴代巫女の中でも二番目に長かったそう。一番は初代だとか。師匠もヤバいけど、初代もヤベエ。

まあ、そんなわけで妖怪と人間のパワーバランスを保ったり・・・もしくはヤベエ妖怪同士がぶつかり合つて幻想郷がぶつ壊れたりしないように、このルールが出来たつてわけだ。

別名で『段幕ごっこ』と呼ばれたりもするらしいがそれは知らなかった。

「ん、そういやさつき言つた『例の妖怪』って・・・噂の人食い妖怪だったりするか？」

「あら、馬鹿兄貴の耳にも入つてたのね、意外だわ」

「腹立つなその言い方・・・まあいい、とにかくさつきと退治してさつきと米貰つてこい」

「言われなくてもそうするわ」

そういや・・・異変ではないが、霊夢初出陣じゃないか？

スペルカードルールを広めるために紫が何かしてくれてるよう。異変は霊夢が代替わりしてから暫く起きないことになっている。

その間は紫の式の・・・なんだっけ？あの狐・・・あーもう、狐でいい

や。

その狐が妖怪たちを沈静してくれてるはずなんだが……あ、別件で忙しいんだな、察した。

霊夢は天才だしいいけるでしょーっていうあれだろうけど……なんだかなあ。

「初陣で負けるのは止めるよ？お前に限ってそれは無いかとは思うが」

「負けるつもりなんて微塵も無いわ。一応初陣だしね」

それにしては緊張してる素振りなんか無いんだよなあ……ある意味すげえ。

「それじゃ行くわね」

そう言つて霊夢は人里の方へと飛んでいった。

……大丈夫かねえ……里の人からの目線。

ま、俺には関係ないか。

……今日ぐらいは、夕食は霊夢の好きなハンバーグにしてやるか。ピーマンソテーを添えてな。

喧嘩四回目

雲ひとつ無い晴天。

心地のよい風。

そして——いつものように賑わっている人々。

「(本当に人食い妖怪なんているのかしら?)」

それが私の感想だった。

とりあえず人里付近に到着した私は人里を避け、その周りの森等を探索することにした。

まだ……あの視線は慣れないのよね。馬鹿兄貴が何であんなに平然と出来るのが不思議だわ。

暫く森を探索するが……成果は得られなかった。

報酬のこともあるし引くには引けない……と、私が思い悩んでいるとき、

「お、霊夢じゃないか。こんな時間にこんな所で何してんだ?」

空から箒で飛んできた私の親友である魔理沙が声を掛けてきた。

まあ、魔理沙も疑問も最もだと思う。

「依頼で動いてるのよ。人食い妖怪に関してね」

「あー、あれか……面白そうじゃないか!」

魔理沙は箒から降りた。そして私と視線を合わせる。

なんか……ニヤニヤしてる。キモいわね。

「霊夢! 勝負しようぜ! どっちが先にその人食い妖怪を退治出来るのかさー!」

「嫌よ面倒くさい!」

「少しは考えようぜ!」

はあ…… どうしてこいつは私と競いたがるのかしら……

この前も出来たばかりのスペルカードで勝負しかけてしたし……

もしかして戦闘狂なのかしら？

「はあ…でも、私も少しその人食い妖怪に興味が出てきたな。確かお前初出陣だろ？手伝ってやるぜ！」

さつきよりもニヤニヤしながら言う魔理沙。こいつ…まあ、恥さえかかなければ大丈夫よね。

「良いわよ別に。それより魔理沙、あんたも何か用事あったんじゃないの？」

「空中散歩してたら偶然霊夢を見つけたから近寄っただけだ。用事なんて無いぜ？」

「それじゃあ手伝って貰おうかしら。あんたも人食い妖怪探しなさい」

「了解だ。あ、もし私が倒したら私の手柄な」

「私としては報酬さえ貰えればいいんだけどね」

なんて、いつものようにどうでもいい会話をしていると…

「i y : @ y q @ # # # ! ! !」

人間の…いや、この世のものとは思えないほど気味が悪く、聞いていると吐き気がするような声が聞こえた。

「お、おい霊夢…」

「ええ…多分ね」

私と魔理沙はその声が出た方向を注意しつつ構える。

出てきたのは――

「7 Z s q ^ @ o ; . ! 7 Z q ! 7 Z q !」

――巨大。あまりにも巨大。

今の今までどこにいたのか、と疑いたくなるレベル。

その表面の色は禍々しい黒褐色。形は見た人に気分を悪くさせるような感じ。

そして… 生きている、という全く感じがしなかった。

相手は自分から動いて声を出しているはずなのに。

「う、うぷっ…」

魔理沙は案の定吐き気が出てきたようだ。

私も無くはないけど…まだ耐えられる。これも博麗の巫女の力か何かなのかしら？

「とりあえず…やるしかないわね」

私はお札、そしてお祓い棒を構える。

「5、q q t 4 k？」

とりあえず…修行の時みたいにやれば大丈夫よ。

あ、その前に…

「あんだ…スペルカードルールって知ってる？」

「…？」

…まるで知らない様子だ。新たに幻想郷に入ってきた妖怪なのかしら？それなら—

「私が勝ったら、幻想郷のルールに染まって貰うわよ」



…う、嘘…

「ハア…ハア…」

「…3…、m 4 6 0 1 u k？」

…ここまで、私の攻撃が通用しないだなんて…!!

…やれることは、全部やったわ…

でも…どれも全く効かなかった。傷一つ負ってなかった。妖怪には効くはずの術が、あれには無傷…

まるで…そう、あれは対博麗の巫女のために存在するかのよう
な…作られたかのような…

「3 f f f f f ! ! d @ , 3 q , @ 9 Z s ! ! !」

「ヒツ…！」

何を言ってるのか分からないけど、完全に笑ったのは分かった。

そして…おそらく私を食べようとしてる。

私はこの瞬間、こいつに対して初めて抱いた感情を見つけた。

—怖い！

—死にたくない！

—食べられたくない！

—なんでこんな目に！

一度思ってしまったえばそれが溢れ出てくる。もう止まらない。

—まだ生きたい！

—助けて！

…助けて…誰に？

私は博麗の巫女。助ける側の人間だ。

それなら…私を助けてくれるのは誰？

魔理沙？いや、魔理沙は違う。助ける人間だとしても、助ける対象

は私じゃない。

紫？いや、紫は幻想郷のためにしか動かない。

…ああ、いるじゃないか。来るはずの無い一人が。

いつも私と喧嘩してるあいつ。いつもは何にも役に立たなそうな

あいつが…

『霊夢、泣くなって！大丈夫だから！』

…これは…誰の声？

『俺がお前を守ってやる！だから…本当に大変な時は、俺を呼べ！

どんな所でも駆けつけてやるから！』

…そうだ、そうだよ…今がその時…例えば、それが有り得ない

ことだとしても。

「お願い、助けて…
お兄ちゃん…」

「…こんなのに手こずってんのか？ 霊夢」

喧嘩五回目

「… こんなのにご手こずってんのか？ 霊夢」

「… え？」

「まったく… 嫌な予感はしていたが、まさか霊夢のことだとはなあ…」

お兄ちゃん… いや、馬鹿兄貴は頭をかきながら面倒くさそうに私のほうを見る。

「魔理沙に感謝しろよ？ あいつが俺に場所を教えてくれなきゃ、遅れるところだったんだからな」

魔理沙が？… そういえば姿が見えないわね… なるほど、馬鹿兄貴の所に行ったのか。

「魔理沙はその後どうするって？」

「けーねに報告に行った… はずだ。多分だから知らん」

さあて、と言いながら馬鹿兄貴は妖怪のほうを向く。その表情はさつきと打って代わり、完全に殺る気の顔だ。

「霊夢… 分かっているだろ？ 俺の仕事をさ」

「… ええ、まあ一応は」

馬鹿兄貴の仕事。それは一言で言ってしまうと、博麗の巫女の補佐的な感じだと思う。

スペルカードルールが制定されてから、肉弾戦での決闘はほぼ無くなった… けど、まだ制定されたばかりなので、中には暴れたいとってスペルカードルールを無視する者も少なくはない。そういうのは基本的にスペルカードルールで戦う博麗の巫女では抑えるのは難しい。

それを抑える役割に入るのが、馬鹿兄貴だ。その為、馬鹿兄貴は特別として、スペルカードルールで戦わなくて良いことになっている。ただし、戦う際は博麗の巫女の許可が必要だ。

だから… 今あの馬鹿兄貴が求めてることは、私の戦闘許可だ。

「見たところ言葉は通じなさそうだしな…ここで倒しておいたほうがいい気がするが？」

「…あんたは暴れただけでしょ？」

「お、少し威勢が戻ってきたじゃないか。もっと甘えてくれてもいいんだぜ？『お兄ちゃん』ってさ」

「ツク!!う、うるさい!!さっさとやりなさいよ馬鹿兄貴!!」

「へいへい…了解したぜ巫女サマ」

改めて妖怪の方を向いて手を鳴らす馬鹿兄貴。そこにはもはや、いつも馬鹿騒ぎしてるあの面影は無い。

「まずは…小手調べっつー!」

——刹那、馬鹿兄貴の拳が妖怪に炸裂する。

「eee!!!」

「あら、割とかてえな…ま、これで俺の能力が発動出来るっつてもんだ」

そういえば…久々に見るかもしれない。馬鹿兄貴の能力なんて。

確か…馬鹿兄貴の能力は『能力を無くす程度の能力』…だったかしら?うん、多分合ってるわね。

一度触れた相手の能力を一時的に無くすことが出来る…みたいな能力のはず。

そして能力って言っても、幻想郷にいる者が持つてるような『く程度の能力』のような能力だけが対象じゃなくて…

「さてまずは…お前から攻撃、防御『能力を無くす』」

「…5、3、2」

…出た。あのチート能力。相変わらず意味わかんないわよね…あれでもう、あの妖怪は肉壁同然よ。

「さてこれでいけるか?…『博麗脚術奥義』」

馬鹿兄貴が一瞬で肉壁と化した妖怪の後ろに回った。そしてそのまま——

『抄地昇天脚』!!」

——真上にぶっ飛ばした。

って… え？あの妖怪… 馬鹿兄貴から受けた傷が治ってる？

「再生能力か… なら、その再生『能力を無くす』」

「… jd@w@?」

あ、これは…

「さて、止めだ… 『博麗拳術奥義』」

馬鹿兄貴はどこからか陰陽玉を取り出して、回転させる。加速、加速、さらに加速。もはやこちらから見たら止まってるかのように。さらに、静電気を帯びて凄いことになってる。

「はああああ!! 『陰陽宝玉』!!」

その回転してる陰陽玉を相手にぶつける。

妖怪はその回転と共に回転し——遙か彼方へ飛んでいった。

「… とりあえずこんなもんでいいだろ。あの回転だし… ほっときや死ぬさ」

「そうね… ツ！馬鹿兄貴!!あんたが妖怪飛ばした方向って… !!」

「んー、あっちって何かあったっ——」

ドツツゴオオオオオン
!!!!!!

「——っけ…」

私達は爆発したかのような音がした方角を、おそろおそろ見る。

見上げると… 倒壊した博麗神社と、先程飛ばされた妖怪がいた。

「あ… やっちゃったぜ☆」

喧嘩六回目

「……………」

「……………」

太陽がまだ登って数時間しか経っていない頃、博麗神社の縁側に私と霊夢が気まずく座っていた。

左側に親友の霊夢。右側に私だ。霊夢は何故か相当機嫌が悪そう。私はそれが少々怖く感じている。

「何か私はやってしまったか？」

私は自問自答するが答えは見つからず。そこで私は、今日はいつもと何かが違うか、を考えることにした。

だがなあ… 特にあるか？

いつも通りそこそこ綺麗に清掃された境内、いつも通り味が薄い茶、いつも通り用意された煎餅、そしていつも通りそれを用意した霊夢の兄貴…………… あ。

「(そーいや霊夢の兄貴がいねえ!!)」

それしかない!… だが考えにくいな。いつも二人は喧嘩ばかりしてる。なら仲は相当悪いはずだからな… ならなんで霊夢はこんな機嫌が悪いんだ？

… 聞いてみるが一番か。

「な、なあ霊夢」

「… なによ」

いつもと比べかなり不機嫌そうな低い声に少しビビってしまったが私は続けた。

「… なんでそんなに機嫌が悪いんだ？」

「… は？」

… え、なんか驚かれたんだが。なんでそんな事聞いたの？みたいな表情してるぞこいつ。マジか… 無自覚かよ。

「いやな、今日のお前はいつもよりもかなーり不機嫌そうだから何かあったのかと思ってな」

「… 別になんともないわよ」

… 流石にこれは誰でも嘘だって分かるぞ。露骨に目を反らしたし。

だが… こいつはなかなか口を割らない性格だ。ここは話題を変えるか。

「あー………… そういや今日はお前の兄貴はいないのか？」

「………… ええ」

「そうかー、買い出しにでも行ったのか？」

「こんな時間に珍しいなーと続けて言うと、霊夢は急に俯きだした。

「………… のよ」

「ん？」

「二日前から帰ってこないのよ!!あの馬鹿兄貴が!!」

「………… は？」

私は霊夢が急に立ち上がったって叫びだしたことと、霊夢の口から出た情報が入り交じり混乱し始めてきた。

そして霊夢は何故か軽く興奮しだしている。

「お、落ち着けて霊夢!一旦座れ!」

「いきなり二日前に散歩に行つたつきり帰ってこないのよ!?!これが落ち着いていられるわけないわ!!」

ダメだこりゃ………… ん、待てよ?………… こんなに怒ってるってことは…………

「お前………… 兄貴がいなくて寂しいんだな…………」

——その言葉を呟いて数秒もしない内に段々霊夢の顔が真っ赤になっっていく。

………… 凶星か?凶星だろうな…………

「な、あ、あ、あんなやつがいなくて寂しいなんてあり得ないわ!!つぶ餡派だし!!目玉焼きには塩だし!!私の嫌いなピーマンをやたら推してくるし!!まあ確かにこの前助けてくれた時は格好良かったけど!!!」

「お、おう……………」

誰も格好いいなんて言っていないぜ………… ってところは心のどっかで

思ってたわけだ。意外な一面だな。

「まあとにかくお前の機嫌が悪い原因はお前の兄貴が不在だったことだな」

「…認めたくないけど、そうね」

なんか落ち着いたみたいだな。それならいいんだが。

にしてもあの霊夢の兄貴がねえ…ま、どっかで道草食ってるんだろうが…

「しようがない、私が探してきてやろう。丁度暇だしな」

「……………いいわよ、どうせひよっこり帰ってくるわ」

「まあ私もそうは思うが…このままだとお前が飢えてしまうだろうしな」

「な！私だって自炊くらいできるわよ！」

「ホントかあ？いつもお前の兄貴がやってるじゃないか。あまり信用出来ないぜ…出来たとしてもあまりいい出来映えじゃなさそうだしな」

証拠に霊夢が前来たときより少し痩せてるんだよな…黙っておくか。

「まあとにかくだ。お前の言った通り多分ひよっこり帰ってくるだろうし、見かけたら早めに帰るよう伝えるだけにしとくぜ。厄介なことに巻き込まれてなきやいいいな」

「……………そうね」

おい、なんだ今の間は。なんかに巻き込まれてるのか？…まあ私には関係ないことだ。

さて、そろそろ行こうかな、と箒を手にしたとき…

「あら…魔理沙もいたのね。まあいいわ」

霊夢の近くからとても胡散臭そうな雰囲気にする声が聞こえてきた。こんな声を出すのはあいつしかいないだろ…

「呼んでないわよ、紫」

「連れられないわねえ霊夢。折角霊華のところへ連れていこうと思ったの

に」

その言葉に霊夢はピクツとした。分かりやすいなあおい。

「魔理沙も… まあ来るわよね。二人とも来なさい。霊華の仕事を見せてあげる」

喧嘩七回目

紫の能力であるスキマに私と魔理沙が入る。そこは紫色で沢山の目があつて常に見られているようで…。まあ、一言で言うなら気味の悪い空間だ。

「おいおい…。私達をどこへ連れていくつもりだ？そんなに遠いところなのか？」

「いえ、遠くはないわ。でも…。今そこに直接行くわけにはいかないのよ」

…。今？ということは今何かあつてるということよね…。何かしら。しかもそこは馬鹿兄貴がいるところ…。思い付かないわね。

「霊夢が思い付かないのも無理はないわ。だって…。私と霊華で秘密にしたことだから」

「…。あんたと馬鹿兄貴が？」

「ええ、この秘密は大体6年前…。霊夢が博麗の巫女ではなかった頃ね。そこから始まったわ」

「で、その秘密って何よ。教えてくれるからそんな話したんでしょね？」

「…。実際に見てもらった方が早いわね」

そうして紫はスキマを開いた。更にそこに透明な結界を張って私達がそこにいけないようにした。

「…。あなたがそれほどの事をするってことは本当にヤバいのね」

「お、見ろよ霊夢！あそこにお前の兄貴がいるぜ！」

魔理沙が指を指す方向を見る。そこには広い草原で一人立っている馬鹿兄貴の後ろ姿があつた。ただ…。ここから結界越しでも分かるレベルに霊力を出していた。馬鹿兄貴は霊力のコントロールは出来なくせして体内に循環させることは出来る。ようは身体強化のようなものだ。それが溢れだしてることとは…。

「…。来たわね」

「え…。？」

紫がそう呟いた刹那。

「a A A A a a a a A A a a a」

「何よ… あれ…」

「うっ… 結界越しでも気持ちが悪くぜ…」

出てきたのは… 一言で表すなら巨大な悪魔。見るだけで吐き気を催すレベルの『何か』。妖力も感じるし霊力も感じるし魔力もあるしほんの僅かではあるけど神力も感じられる… なんなのよあれ！

「あれは合成種… 小さい妖怪、人間、神の集まりよ。どのようにして生まれたのかは定かではないけれど… どんな偶然か時々幻想郷のここ、無縁塚にやってくるのよ」

「まさか馬鹿兄貴は…！」

「ええそうよ。あれを討伐する。それが霊華の仕事よ」



「紫!!今すぐ止めさせなさい!!」

霊夢は自分と霊華との喧嘩でも出したことの無いような声で紫に言う。その声に魔理沙は驚いた表情で、紫はまるでそれが分かったたかの表情で霊夢を見る。

その表情は焦り、不安、怒り等が入り交じっておりプルプル震えている。

「駄目よ霊夢。あれは霊華自身で選んだ道なの。それにあなたが手を出してはいけないわ。霊華だからこそ出来ることなの」

「どういうことよそれ!!」

霊夢は興奮して今にもスキマの結界を打ち破ってしまいそうな気配だ。そこを魔理沙が引き留める。

「何すんの上魔理沙!!邪魔よ!!」

「いや冷静に考えてみようぜ霊夢。確かに紫の言ってることは訳分かんないけどさ、わざわざ私達に見せたってことは何かあるはずだ…そうだろう?」

「…ええ、そうよ」

紫の表情は変わらない。

「あれに理性というものは存在しないわ。ただ本能のみで動く。だから当然スペルカードルールは意味は無いわ。しかもあれは複数の能力を持つてることが多い。よって普通の妖怪や人間じゃ対処は不可能なの」

「…なるほど、だから馬鹿兄貴が必要なのね」

「それだけじゃないわ。あれはもはや存在自体が癌そのもの。存在するだけで近くににいる者や植物…もつと言えば幻想郷が汚染されるわ」

「!?!」

その言葉を聞き二人は驚愕し… 霊夢はまた目付きがさつききょうになった。

「だったら何で馬鹿兄貴は無事なのよ!!その言い方だったら馬鹿兄貴だって汚染されるじゃない!!」

「…だからこそ霊華なのよ。自分を汚染するという能力を『消せる』。これ以上都合のいい者はいないわ」

紫は淡々と告げ目線を霊華のほうにやる。まだ霊夢は納得してない様子だったが、魔理沙から宥められしづしづ目線を霊華にやった。

「まあ、それだけではないんだけどね」

紫はそう考えながら扇子で口元を隠しながら霊華を見守っていた。

戦闘はもうすぐ始まる。

喧嘩八回目

瞬間——靈華が『何か』の背後に回る。

その速さはさながら瞬間移動。紫は普通に目で追い、靈夢はなんとかギリギリ見れ、魔理沙にいたつてはいきなり背後に回ったからか靈華のもといた場所と移動した場所を驚愕とした顔で見た。

「っはああ!!!」

まずは一発、と言わんばかりの拳を『何か』に放つ。しかし全く喰らってないようで『何か』はビクともしない。

「…ちよいめんどいな」

誰にも聞き取れないレベルの小さな声で靈華は呟く。普段の彼ならまず言わない言葉だ。

実は、靈華の能力である『能力を消す程度の能力』は靈華自身しか知らない…。いや、ある一人を除いて靈華が誰にも教えてない弱点がある。それは——万能ではない、ということだ。

そう、この能力を持つてしても完全にどんな相手でも能力を消せるわけではない。自分よりも実力が上な相手…。例えるならば靈華の師匠の先代の巫女、八雲紫やかつて妖怪の山の頂点にいた鬼のような上級の妖怪等には完全には消せない。

しかしだ、それならば何故靈華は全てを汚染する『何か』を前にして無事なのか？

——それは靈華が『自身が汚染される能力』を消したからである。『能力』の基準は靈華が定める。よって無事なのだ。しかし自身に使うことは非常に強い反動が来るらしいからあまり使わない事が多いらしい。反動込みにしてもチートだろこれ。

…さて、先程述べた靈華の能力の弱点だが、どうにか出来ないわけではない。方法は物凄く簡単、対象を弱らせればよい。どこまでかは相手にもよるがとにかく弱らせればよいのだ。

ちなみにこの事を知っているのは先代の巫女だ。彼女は勘で紫に教えると後々面倒くさい、と察し靈華に誰にも言わないようにさせたのだ。現に紫はこの事を知らないため靈華を恐れつつも頼りにして

いる。

霊華は『何か』を錯乱させるように動く、動く、とにかく動く。並大抵の存在なら見切ることさえも難しいレベルに。

だが翻弄されるだけの『何か』じゃない。突然何も無いはずの場所に光線を飛ばした。

「ツチ!!」

そこには左肩に少し光線が当たり一部が火傷した霊華。確実に相手は霊華よりも上の存在であった。



「お兄ちゃん!!」

「・・・え、『お兄ちゃん』?」

「え?あ.....」

霊夢の突然な叫びに魔理沙が反応する。当然だろう。いつもは霊華のことは『馬鹿兄貴』と軽く罵倒しているあの霊夢が物凄く心配そうにそういったのだから。

それに対して紫はニヤニヤしながら言う。

「あら、魔理沙は知らなかったのかしら... 霊夢の素はこっちなのよ?」

「ちよ!!何言ってるのよ紫!!」

「そうか... 霊夢はお兄ちゃんっ子なんだな...」
「ツ~~~~!!」

霊夢の顔は今物凄く真っ赤だ。その様子はもはや霊華が今死闘を繰り広げていることなんて忘れてるよう。

しかし、すぐさま霊夢はハツとして霊華のほうを向き直した。

「お兄…… 馬鹿兄貴は大丈夫よね？」

まるで独り言のように呟かれたその言葉に紫が反応する。

「……ええ」

それだけ、たったそれだけの返事なのだが霊夢は安心したのかフーツとため息をついた。

「(何やってるのよあの子は！早くあの技を出しなさいよ！あれさえ出せばすぐ終わるはずでしょうが！)」

なお、紫は内心とても荒れていた。



「…… 大分いい感じだな」

そういった霊華の目の前にはある程度弱ってしまい、移動能力、攻撃防御能力が無くなった『何か』がいた。

「こいつ体力半端ねえから面倒くさかったな…… 後で紫に文句でも言うか」

さて、と霊華は自身の霊力をため始めた。全身に回していた霊力を一つに集める。

『忘却式』……」

それが今—— 一気に大きな光線として放たれる！

『神隠し』っ！！！！
「

その光線に包まれた『何か』は…… 跡形もなく消えてしまった。当然、文字通りである。その存在がそこにあったとは思えないほどだ。

——その瞬間、霊夢と魔理沙から何かが消えた。

「…あれ？」

「ん？」

さつきまで霊華の戦いを見ていた霊夢と魔理沙は意味が分からなさそうにスキマを見た。

霊夢は紫を見つけてから言う。

「…ねえ紫、馬鹿兄貴はどこにいるの？」

「お、霊夢！あそこにいるぜ！何かボーツしてんなあ…何してんだ？」

「確かあそこは無縁塚…霖之助さんの商品回収かしら？」

何か様子がおかしい。そう思っても仕方がないだろう。

「(流石『忘却式 神隠し』ね…魔理沙はともかく霊夢まで技に干渉させるなんて…)」

『忘却式 神隠し』。これは霊華の編み出した霊華のみの究極奥義である。やり方はただただ単純、霊力を貯めてぶっぱする…だけらしい。この技を少しでも喰らった者は存在が消される。そしてそれに関わった者からそれに関する記憶を全て消してしまうのだ。

『何か』はこの技をくらってしまった。よってそれを見た霊夢と魔理沙から『何か』に関する情報が消えてなくなってしまったのだ。

それだけではない。『何か』によって汚染されていたはずの無縁塚が今では何事もなかったかのように平然としている。

『何か』は最初から存在なんてしなかった、そういう世界になったということだ。

ちなみに紫は自身に非常に高度な結界を張っていたのでギリギリ干渉せずに済んだ。ゆかり人もなかなかチート。

「(まあ、だから連れてきたんだだけだね)」

紫は知っていた。だから霊夢と魔理沙を連れてきたのだ。

紫はパンパンと手を叩いて霊夢と魔理沙を呼ぶ。そして博麗神社へ通ずるスキマを開いた。

「もう分かったでしょ？霊華には私から言っておくから先に帰ってなやう」

「…分かったわよ」

「霊夢、露骨に喜びすぎだぜ？いくらお前の兄貴が無事だったからってさ」

「ツうるさいわね魔理沙。退治してあげましょうか？」

「わ、悪かったぜ…」

こんな微笑ましい光景を見つつ、紫は霊華が最初にこの仕事をするときに交わした契約を思い出していた。

『紫、この仕事のことには霊夢には内緒に頼む』

『あら、どうしてかしら？教えた方が協力してくれると思うのだけだっど？』

『いや…な？霊夢は博麗の巫女だし…な？余計な心配させたくないってか…な？』

『…フフツ、分かったわよ』

『お、おう…何でニヤついてんだ？』

『内緒よ…さて、行ってらっしゃい』

『…行ってきます』

「フフツ、本当はお互いがお互いのこと大好きなのにねえ…不器用な子達。それがまた可愛いものだけけどね…神社倒壊は勘弁してほしいけど」



「霊華が神社に帰宅後…」

「ふう…疲れたなさすがに」

「馬鹿兄貴!!どこほつつき歩いてたのよ!!」

「あー… ちよつとな」
「全く… おかえり」
「!… ただいま」

喧嘩九回目

「だ——か——ら——!!絶対団子はあるわけだよ!!」

「いや、団子はみたらしだ。異論は認めん!!」

「... どうやら実力で分からせる必要があるよね」

「お、やるか?弾幕ごっこ以外ならウエルカムだぞ」

「じゃあ弾幕ごっこね」

「よしわかった、殴りあいな」

「はあ... ああ、あんかけとみたらしが二個ずつ両方ともあるやつがあるだろう?あれでいいじゃねえか」

「いや、あれは邪道だ(よ)」

「なんなんだよお前ら!!」

いつものような喧嘩、いつものような息ぴったりなところに私はため息をつく。

行方が分かんなかった霊華が戻ってきてから霊夢が落ち着いてから安心していたが... 喧嘩を見ると面倒くさいと本当に感じる。これがこいつらの日常とはいえ、なあ...

「まあ、今日はちよつといつもとは違うな」

そういつて私は赤い霧が出ている空を見上げた。

今、幻想郷は赤い霧によって包まれているのである。



「つたく、なんで俺まで...」

「いいから来なさい馬鹿兄貴。博麗の巫女からの命令よ」

「へーへー了承でさあ巫女サマ」

「... むかつくわね。異変解決の前に退治しておきましょうか?」

「お前ごときに遅れを取る俺じゃないぜ?返り討ちにしてやらあ」

「まったくお前らなあ!!こんな時位大人しくしろよ!!」

現在、幻想郷に発生した謎の赤い霧。これは人体や農作物等に被害があるため、これを解決するために博麗の巫女である霊夢——と何故か霊華と魔理沙が来ていた。

霊華は何故か…… 本当に何故か霊夢から来いと言われてしぶしぶ来ていた。それを見た魔理沙が『二人で行かせたら絶対にぐだぐだするぜ……』ってことで…… まあ謂わば仲裁役として着いてきた。苦勞人である。

「にしてもだなあ…… 今回の異変、初めてのスペルカードル採用なんだってな。何で俺連れてきたんだよ霊夢…… 俺スペルカードなんて一枚もねえぞ?」

「だからこそよ。いざと言うとき身代わり出来るでしょ?」

「ひでえなおい」

そんな会話をしつつ霧の元凶…… は、まだよく分かってないが、あの辺りじゃね? って方向へ向かう三人。

道中に常闇の妖怪やら氷の妖精やらを瞬殺しながら進んでいく。

「空飛べるってすげえなあ……」

「いや、飛んでる私達にジャンプで着いてきてるお前の方がすげえからな!」



「おー…… あの湖越えてからなんか霧が濃くなってきたな」

「そうね…… この先にこの異変の元凶がいるのかしら」

「周りにあるものも人工物のようだしなあ…… なあ、マジで俺帰っていいか?」

「くどい」

「さいですか……」

露骨に表情を歪めて立ち止まる霊華。そんなことは知らねえと言わんばかりに霊夢と…… 完全に異変の発生源に興味をそそらてた魔

理沙が先へ進む。

「… しゃーねえ、いくか」

と、ある程度霊華が進んでいくと止まっている二人を見つけた。どうやら… 話をしてしているようである。

話をしている相手は… 派手な色の服を来た長い赤い髪を持つ女性だった。その佇まいから格闘家のように見える。

そして後ろには霧の発生源であろう謎の赤い館… 言うなればこの女性は門番のようだった。

「… ん？」

霊華はすぐ感じ取れた。

「こいつ… 武道派か」

するとその門番も霊華の方を向いた。相手も気付いたようだ。霊華が武道派だと。

「… 霊夢、ここは俺に任せちゃあくれないか。こいつは俺がなんとかするからさ」

「… まあ、最初からそのつもりだったわ。行くわよ魔理沙」

「え!?!… 霊夢の兄貴は弾幕ごっこ出来ないんだろ? 大丈夫なのか?」

「ええ大丈夫よ。だって、今から馬鹿兄貴がやるのは弾幕ごっこじゃないもの」

「… はあ?」

霊夢はサッと後ろを振り返らずに館の方へ進んでいった。魔理沙はまだ納得していない様子だったが、館への興味が勝つてしまい同じく館の方へ行った。

残ったのは霊華と門番のみ。

「… 随分あっさりとお通してくれるんだな?」

「お嬢様から受けた命令はただ一つ。『博麗の巫女とスペルカードルールで戦って負けろ』です。最初からここを通すつもりでしたよ」
「なるほどね…」

「… ですが、私はあなたを通す訳にはいきません」

「出来れば霊夢のやつを見守りたいんだがな…それは命令なのか？」

「いいえ、私の個人的な話です。あなたのような一目で強いと分かる人なんて初めて見ました！…さあ!!ここを通りたければ、私と戦いなさい!!!」

門番はさつきまで無かった殺気のようなものを垂れ流して霊華に浴びさせる。しかし霊華はこれに動じず続けた。

「そうかい…なら、通してもらう為には戦わなきゃ駄目ってことか…実は俺もな、お前みたいな相手と戦うのは初めてなんだよ。基本人外だったしな…だから、正直お前と戦えることを期待してた！」

霊華は門番に向けて清々しい顔で叫ぶ。

「名を名乗ろう!!俺の名は『博麗霊華』!!当代博麗の巫女、『博麗霊夢』の兄貴だ!!」

それに応えるように門番も叫んだ。

「私の名は『紅美鈴』!!この紅魔館の唯一無二の門番です!!」

お互いの自己紹介が済んだかと思えば二人は同時にニヤツと笑った。

「いざ尋常に!!!」

「勝負です!!!」

喧嘩十回目

——先に動いたのは靈華。小手調べだと言わんばかりの拳の一撃を美鈴に喰らわせる…。が、美鈴はこれを容易く受け止める。そして靈華は美鈴に蹴りを入れ一旦距離を取った。

「…それなりに力は抜いてるが、ここまで簡単に止められるなんてな…。これは短期決着にするべきか？」

「(意外と強いですね…。長引かせると危険かもです)」

内心そのように考えた二人。その瞬間——双方の雰囲気が変わる。靈華は靈夢と喧嘩する時よりも純度の高いオーラのようなものを放出、美鈴もオーラ…。とはまた違うものを纏っていた。それにより地面が軽く揺れ一部には亀裂が入ってる。

「——ハッ!!」

次に動いたのは美鈴。素人の目には確実に追えないレベルの速さで靈華に接近し、今にも腹に左拳を当てようとしている。

「チッ！」

しかし靈華は武道に関しては素人ではない。とっさに守りの体制に入るが……

「——お、重っ!!」

その一撃が重く体制を崩してしまった。そこを見逃す美鈴ではない。

「貰った——!!!」

構えていた右拳で止めと言わんばかりに全力で放つ。当然靈華は飛ばされて——木の幹に激突した。

——ここで美鈴は違和感を感じる。

「…『氣』を使えなかった…?」

紅魔館の門番、紅美鈴の能力は『氣を使う程度の能力』。それは気配

りという意味でなくオーラのようなものを扱うという能力なのだ。霊華に与えた重い一撃もこの気が関係している。

しかし、二撃目の拳も気を込めて放ったはずなのに気が突然使えなくなつたのだ。しかもまるで気がいきなり消滅したかのように。

「…意外と判定ザルなんだなこの能力」

「!？」

言葉を放つたのは先ほど吹っ飛ばされた霊華。多少の傷は負っているものの、普通に立ち上がった。

「さつきお前の持つ『程度の能力』を無くした。正直これで消せるなんて思つてもみなかった。」

それはつまりもう美鈴は気を扱うことが出来ないことを指す。

「それがあなたの能力ですか…」

「ま、そういうこつた…早く先へ行きたいんでな。お前から場所を移動するという『能力を無くす』」

「ツ!! 足が…!!」

まるで石になつてしまつたかのように美鈴の足は硬直して動かない。それはすなわち、美鈴のピンチを表していた。

「本当はもうちよつとじつくり決闘したかつたんだがな…あいつが心配になつた。許せ」

「な、何を…」

「追つてこられると困るんでな…ほい」

「あいたつー!」

美鈴の額にとある札が勢いよく貼られた。それには小難しく『博麗』の文字がかかかかっている。

「霊夢から持たせられてた対妖怪用の札だ。それが貼られてる間は動けないはずだ…常に能力を発動し続けるのは疲れるからな」

そして美鈴に向き合つて霊華は続けた。

「お前とは普通に決着を着けたい。だから…今日はここで我慢してくれ」

「——フフツ、分かりました。どうぞ通つてください」
「すまん」

そういつて靈華は門をくぐり紅魔館へ入っていく。
その後にとてつもなく面倒な出来事に巻き込まれることなど微塵
も思わずに…

喧嘩十一回目

『猿も木から落ちる』ということわざがある。これは、どんなにその部門に精通していたとしても失敗することがある、という意味……だと思ってる。言葉事態は知ってるやつも多いと思う。

余談になるが、俺は方向音痴じゃない。博麗の名を背負ってるからかは分からないが、勘で大体どこへ向かえば正解なのか分かるのだ。話は変わって現在。俺はこの赤い霧の異変の元凶がいるであろう屋敷……紅魔館だっけ？そこに入ったんだ。だが――

「……どうだよハハ」

――完全に道に迷っちゃまった。

全く、勘は機能しないしやけに静かだし……どこへ向かえばいいのかさっぱり分からん。

……なんとなくだが、下に行けばいい気がしてきた。これもなんとなくだが、地下室がある気がする。急にそこへの嫌な予感が発生したんだが……とりあえずそこに向かってみるか。

ということ、俺は地下室へ繋がってるであろう場所を勘で探しながら紅魔館をさ迷い始めたんだ。さつきも言ったんだが、物音が全然しない。さらに、見られているという気配も全然感じない。こんだけ大きな屋敷だしお掃除係みたいなやつが一人や二人いると思っただがなあ……誰もいないじゃないか。

こんな調子で進んでいくと……他の場所とは違う感じの扉の目の前まで来た。どこが違うかって言えば……両開きなことだな。他は片開きになっているんだが、ここだけは両開きなんだ。デザインは同じだがな……ここになにかある。これは勘じゃなくても分かることだろう。

最大限の警戒をしつつ、俺はその扉を開けると――

「……おお」

—— 無数の本棚がそこにあった。

軽く見渡すだけでざっと一万はあるだろう、というレベルの量。料理の本や文庫、魔法の本もあるのか… 凄いなこれ。

にしても… 広いなここ。屋敷でもくっそ広がったのにここも広いとか… 空間を操る程度の能力を持つてるやつがいたりでもするのか？なら相当面倒くさそうだが…

そこで歩き回っていると… なんか階下への階段があった。なんか凄く… あれだな。うん、あれだ。何て現せばいいのか… 凄くここにこの先に何かいますよーって雰囲気出てんな…

もしかしたらこの先に霊夢や魔理沙がいるのかもしれないな… 行ってみるか。

… くつら。めちやくそ暗いぞここ。階下へ向かっているのは分かるが暗いから方向が掴めない…

そして今感じてるこのピリピリした空気はなんだ？ 殺気のような… そうでもないような… 変な感じだ。

お、階段が終わったな… おおう、なんか物凄く頑丈そうな扉があるな。鉄で出来てら… この先がボスカ。

迷っても仕方ないか… いくか。

俺は扉へ全力で殴って扉を破壊する。そこには——

「あなた、だあれ？」

とてもボスとは思えないような、金髪のとても小さな女の子がいた。

喧嘩十二回目

異変の発生源の可能性が非常に高い紅魔館の門番相手を靈華に任せ、靈夢と魔理沙はその内部へと侵入し、異変の元凶探しをしていた……といつても、魔理沙の方は当初、お宝探しをしていたのだが適当に探し回っている内に靈夢と合流して流れで異変を元凶に對面しようとしているだけなのだ。

靈夢が倒したのは時を操るメイド長、魔理沙が倒したのは本物のちよつと病弱な魔女だ。靈夢はともかく、魔理沙とこの魔女が本気の魔法対決をしたら魔理沙は確実に敗れていただろう……が、この異変は『スペルカードルール』で形成されているため両者とも勝利が出来た。

そして現在——二人は紅魔館の外に出て、紅い月のある空の方へ向かっている。

「いるいる、寒気が走るわこの妖気。なんで強力なやつほど隠れるんだろうな？ 靈夢」

「さあね、能ある鷹は爪を隠すってやつじゃないの？……ふう、そろそろ姿を見せていいんじゃない？——お嬢さん？」

靈夢が紅い月のほうにそう問いかけると——辺りの空気が静かなものから、寒気があるものへと変化した。

元々寒気はあったのかも知れない……が、それが増したことは言うまでもない。

「あらあら、人間が二人……この私に何の用かしら？」

どこから飛んできたのか、沢山の蝙蝠達が一ヶ所に集まり一人の少女を形成している。先程の台詞はその少女が述べたものだ。

背の高さは靈夢や魔理沙と大体10〜15cm程度小さい。姿だけを見るならば人里の寺子屋に通っている子供たちとあまり違いないかもしれない……そう、姿だけならば。

しかしその少女からは覇気のようなものがあふれでていた。これ

を一言で表すなら・・・そう、『カリスマ』とするのが正しいだろう。顔つきも明らかにそこらの子供がするようなものではなく、凜とした表情を掲げている。背中から生えている黒い蝙蝠のような羽はまるで強さを象徴しているかのよう。まさに、夜の王者そのものだ。

「お前、名前は何て言うんだ？」

「あら？ここでは名前を名乗って欲しいときはまず自分から言うに従者から聞いたのだけれど？」

「私は霧雨魔理沙、普通の魔法使いだ」

「博麗霊夢よ・・・あんたがこの変な霧の元凶ね？」

「名乗られたからには言うしかないわね。レミリア・スカーレットよ。ついでに、質問の答えはイエスだわ」

「やっぱりな・・・何でこんなことしたんだ？」

「私としては理由なんてどうでもいいからさっさとやめて欲しいんだけど」

「私、病弱なのよ・・・日光に弱いから。だから中々お外に出して貰えないの」

「へー、それは難儀なことだな」

「それで、何しに来たのかしら？もうお腹はいっぱいなのだけれど・・・」

「あんたを打ちのめしにきたわ」

「私はそのついでだぜ」

「・・・フツツ、やっぱり人間は面白いわね。そんな冗談が言えるなんて」

「なら、それが冗談か試してみる？」

「そうねえ・・・こんなに月が紅いから——」

「「「楽しい（涼しい）夜（なり）そうね（だ）」」」

さあ、この異変の最終決戦が開始されようとしている。お払い棒や札を構える霊夢、八卦炉を持って準備完了の魔理沙、常に余裕そうな笑みを浮かべているレミリア・・・緊張感が漂い、攻防が始まろうとし

たその時――

ドツゴオオオオオン!!!

「…え？」

「は？」

「え？」

――紅魔館内部の図書館付近で、博麗神社の倒壊を思わせるような…いや、それ以上の爆発音が発生した。

しかも、それは一度や二度ではなく…小規模だったり、先程のレベルの爆発だったりと紅魔館の至るところで発生し始める。

「え、ちよ、えっ!?!?どういふことなの!?!」

先程までの余裕はどこへ行ってしまったのか。いきなり自身の館が爆発を起こしたためかレミリアは紅魔館を見て、焦りと驚きが混じったような声を出している。今なら倒すのは簡単かもしれないが…そこまで霊夢や魔理沙は非情ではなかった。といっても、二人はまだ混乱から正気に戻っていなかったということもあるが。

徐々に爆発で発生した煙が消えていき、発生源の姿が見えるようになってきた。見ると二人の人型生物が戦闘をしているよう。

「…ん?お、おい霊夢…あれってもしかして…」

霊夢より一足先に正気に戻った魔理沙が霊夢の肩を叩きながらその方向を指差す。それによって正気に戻った霊夢が魔理沙の指差すところを見つめ始めた。

更に煙が晴れ、詳しい情報が目に写る。片方の人型は金髪のように、そしてレミリアと同じようなナイトキャップを装備していた。背の高さはもう片方よりも小さく、子供のようだと感じていた。

そのもう片方は…そう、いつも霊夢と喧嘩をしていて、その際の

神社倒壊は当たり前。しかも内容も相当下らなくて霊夢と同じく意地っ張り。だけど霊夢のピンチの時はさすがに駆けつけ助けてくれる…。その男、博麗霊華そのものだったのだ。

「馬鹿兄貴!!?」

「フラン!!?」

——さて、時を数分遡ろう。

喧嘩十三回目

「あなた、だあれ？」

——このボスがいると思って扉開けたら女の子がいた…。いや
どういふことだよ。その子かなり不思議そうにこつち見てるし、その
子が持つてる人形めちやくちやになつてるし…。つて、めちやくちや
？

そーい、や、というこゝで軽くその子がいる部屋を見渡してみる
と…。とてもボスの部屋とは思えないよーな部屋だつた。

まず簡潔に表すなら質素。外見も中身もそれなりに高級感があつ
たのにも関わらず、この部屋だけはかなり雑な作りになつていた。て
か壁とか床とか全部鉄製じゃないかこれ？

そして家具。所々置いてはあるんだ…。が、かなりぐちやくちや。
壊れてたり、もはやこれなんの家具だつたんだよつてレベルでだ…。
逆にどうしたらここまゝでなるのか謎だ。

最後に…。もうこの扉開けた時点からなんとなく察してはいた。
壁、床、その他に…。赤い血の跡がたつくさんある。黒くなつてたり
するやつもある。多分…。この子の血じゃあない。多分…。あそこ
に転がつてる肉みたいなの何かの——

「ねえねえ、無視しないで！あなたはだれなの？」

推測に耽つていゝとその子から声をかけられた。

おつと、やつちまつたな。こーいふ小さい子は待たされるのが大嫌
いなんだよな。あの頃の霊夢もそうだつた。

「悪い悪い、少しだけ考え事をしてた。俺はな、博麗霊華つていゝん
だ。宜しくな」

万が一を考えて先に触れておくために右手を差し出す。応じてく

ればこれで一応一回は触れたことになるし、かなり自然だ。仮に叩かれたとしても接触はしてるから問題ない。

「わたしフランドール・スカーレットって言うの！あなたはれーかっていうんだあ… うん、宜しくね！」

おつとある意味予想外、握手に応じてくれたみたいだ。そこからはこつちを警戒してる様子とかは全く見受けられない。本当に無邪気な子供みたいだ… ま、これで一応触れた。さっきから変な殺気がビシビシと伝わってくるんだ。これで警戒するなって言われるのが難しいだろ。

「ねえ、れーかって人間だよね？」

「ん？ああ、そうだな… お前は？」

「お前じゃなくてフラン！フランって呼んでね！あ、フランはね、吸血鬼なの！」

「吸血鬼… ああ、だからこの時間に異変を起こしたのか」

確か人里の書店で吸血鬼についての本に書いてあったな。曰く、太陽と流水が苦手だとか。

「？… 異変って何？」

「そりゃ… おい待て。今外で何が起きてるか知らないのか？」

「うん。だってアイツが外に出るなって言うんだもん」

「アイツ…？」

「私のお姉さま。レミリアお姉さまよ。このこーまかんの主なんだって」

「はーなるほどね」

ってことはやっぱこの子はボスじゃないのか。ならそのレ… レ… レプリカ？のどこへ行かなきゃな。

… レプリカと言えば最近、ピーマン料理作って無かったな。そろそろ作らなきゃな…

「んで、フランはどれくらいここにいるんだ？かなり雰囲気悪いところだが」

「うまれてからずっと。495年間ずっと閉じ込められてるの」

「… はっ。」

そんな永い期間ここに閉じ込められてたら誰でも発狂しちゃうだろ…… 何か理由でもなきやただの虐待だぞ……

「あ、でもね！フランはぜんぜん退屈じゃないよ！だって……」

「……ん？」

突然、フランの雰囲気ガラリと変化する。先程までのただの無邪気な子供ではなく…… 例えるならそう——

——人を殺すことに快楽を覚えた害悪妖怪のような。

「れーかみみたいなオモチヤがたまにやッて来ルカら!!」

——ぐしゃり、と何かが潰れるような音が耳を掠めた。それはまるで料理をしているときに肉を誤って力一杯握りつぶしてしまったときみたいな、そんな感じの音。

そして飛びちる赤い血。どこから飛び散ったのかを見てみれば——

——そこにあるはずの左腕がそこにはなかった。

「ッ！」

沸き上がってくる左腕を失った物凄い痛み。すぐに左肩から先の感覚を感じる能力を無くし痛覚を遮断する。これで痛みは無くなったものの…… きついな。

「アはハ♪キレイな血だヨオ、れーか！」

「……そういうことかよ」

フランは狂ってる。多分そういう方面で頭がイッチまってしまっているんだ。それを見てフランの姉のレプリカはフランを閉じ込め

る、という選択を取ったんだろう。その選択は正しいのかもしれない……が、俺は知っている。

この場合だと……フランに莫大なストレスがかかる。それは時間をかければかけるほど更に大きくなって……いつか爆発する。爆発しちまったらもう止められない。地獄の始まりさ。

こういうのに対応するなら……適度にストレス発散させたりして、暖かく見守りながら一緒に歩いていくのが正解だと思う。

……ツチ、面倒なことになっちまった……けどな、小さかった霊夢に似てて見捨てれないんだよ……畜生。

「ねエ、れーか……アソぼうよ!!」

「……ああいいぜ?」

ここで、フランの持つ能力を消す。格上相手ならほんの短時間しか消せなかったりするんだが……

「……あれ?きゅつとしてドカーンが……デキない?」

……思惑通りかもだ。多分フランは自分の力の制御が出来てないんだろう。出来るやつは相手にすればくつそ面倒。だから相手にはしたくないな……

「フラン、お前の能力は消した……もうそれは懲り懲りだしな」

「……アハ♪れーかは他のオモチャとは違ウンだね!」

……フランの相手もあんまりしたくないがな……

「——お前の遊びに付き合ってやるよ!」

喧嘩十四回目

左腕が使えない… てか消えてしまったんだが、俺は元気です。
… つて、そんなこと考えてる余裕なんかねえわ。

「アハハハハ!!まだ壊レテないンダね!れーか!!」
「そりやまあ壊されるわけにはいかねえからな… つとお危ねえ!!」

フラン… 強すぎないか? いやまだ強大な力ぶん回してるだけだから少し余裕はあるが… それはそれで達が悪いしなあ。

… しかも、無意識だろうが俺のこの能力の弱点を付かれたんだよな。それに気付かれたらマジで終わる… あれ、そもそもフランは俺の能力を詳しく知らないか。

「ふふふフフふ… 面白い技使うノねえ… れーか」

俺のやってる事は身体に靈力を循環させて身体能力上昇させたり、陰陽玉をぶん投げたりしてるくらいだが… 面白いもんなのかねえ…

「俺からしたらフランが持つてる炎の剣みたいなのもつとヤベーとは思うがな」

「レーヴァテイン。使うのはホントに久しぶり!!」

次の瞬間——フランの一振りで屋敷が半分崩壊した。

… えっぐ。あれは流石に喰らったら死ぬわ。

「アツハハハハ!!まだマダ足りないヨオ!!」

「ツハ、そーかよお!!」

——なんか軽くパニックって来たから整理するか。

まず、俺の能力——『能力を消す能力』の弱点だが… 存在するの
が当たり前過ぎて今まで忘れてた。それはだな… 『四肢が五体満足
で無事である』ということだ。いや仕方ないだろ。左腕が吹き飛ぶな

んで誰が予測出来るか。

具体的には動かさせさえすればよし、って感じでな。相手に触れれば能力は消せるんだがそれは手や足限定。足は普段靴を履いてるから実質手だけだな。

つまり、四肢で能力をコントロールしてるって言っても過言じゃない。だから今かなり能力が低下してる。

ならなんでフランの能力は消せたのか?…多分だが、これはフラン自身に問題がある。一言で表すならフランは『不完全』なんだ。精神にしろ、能力にしろな。

不完全なものほど消すのは簡単だ。隙があるからな。

だが完全は…完成されたものはどうだろうか。即ち、隙がほぼない。だから消せたとしても少しの間だけだったりするんだ。

しかも、俺が見つけた『能力の消しにくさ』ってのもある。これは全ての生物が持っているものほど消しにくくなる仕様だ。具体的には…歩く、走るなどの移動能力。自衛のため、食料のための戦闘能力… そうだ、『本能』だ。本能に近い能力はかなり消しにくい。

逆に全ての生物が精通して持ってないもの…ここ、幻想郷言うなら『程度の能力』だな、それは比較的消しやすい。比較的っていうだけで実際そうでもないが。

そこに自分よりレベルが高い者… まあ、紫とかその辺りか?それの能力は最高レベルに消すのが難しいってのが加わる。てか一時的でも完全に消すのはほぼ無理。まあ、弱らせればやれないことはないが… それもそれで厳しいだろうな。ちよつと燃えるが。

今までは俺よりもかなりレベルが低かったからなんとか出来たんだが… 今回は厳しそうだ。マジで左腕失ったの痛い。

——まあここまでは、俺の『能力』で決着を着ける場合の話だな。

「…よし、頭冴えた。反撃開始」



先程の爆発によって、これからスペルカードルールで対決を行おうとしていた霊夢、魔理沙、レミリアは未だにその場から動けずにいた。頭の中ではどうしてこうなったのかを考えるばかりであって、軽く現実逃避をしていたのだ。

——だが、ここでいち早く正気に戻れた者がいた。

「——フランツ!!」

その声から察せられるように、紅魔館の主であり、本異変の首謀者であるレミリア・スカーレットである。

彼女の齢は500。幻想郷で見れば大したことのない年数かもしれないが、人間からすれば圧倒的だ。対して霊夢、魔理沙はまだ20歳にも満たない女子。その差もあるのだろう…。いち早く状況を解釈に屋敷で暴れてる二人のうち、フランの元へ向かっていく。

——が、それは問屋が卸さない。

「行かせないわよ!!」

「ぐっ… 邪魔をするな人間っ!!」

レミリアが正気に戻ったコンマ0.1秒程度後に戻った霊夢がレミリアの前に立ちふさがる。もはやスペルカードルールなんて無視されて吸血鬼本来の力で霊夢をどかさうとするレミリアだが…。そこは当代博麗の巫女、しつかり受け止められていた。

「そこを退け!!私には行かなくちゃならないんだ!!」

「... あんた、もしかしてそのフランってやつが馬鹿兄貴に殺されるとか考えてんの?」

「そうだ!あの子はまだ戦闘慣れしてない!だから私は行くんだ!異変の償いなら後でやる!なんだってやってやる!!だから... だから頼む!!... ここを通してくれ...!!!」

霊夢は一瞬だが怯む。さっきまで絶対的支配者の雰囲気醸し出していたのにも関わらず、今では自分に対して頭を下げているからだ。

その様子を見て..... 霊夢はとても大きなため息をついた。それのおかげか、魔理沙も正気に戻る。

「... まあ、馬鹿兄貴を見るのは初めてだろうし教えてあげるわ。あいつは絶対妖怪を殺したりしない。どんな状況になってもそうだったわ」

「っ!... そんな世迷い言なんて!」

「いや、確かこの前の霊夢をピンチで駆け付けた時も相手の妖怪は殺してなかったはずだぜ?ぶっ飛ばしたただけだな。そのせいで神社倒壊したが」

魔理沙も霊夢に重ねて言うが... まだレミリアは納得してない様子。まあ、それが普通であろう... が、少しレミリアの力が押さええられたようだった。

「てか私としてはお前の兄貴が心配なんだが。どう見ても圧されてるだろアレ... 最悪殺されるぞ?」

確かに、現在霊華は攻撃をせずつと守りに入っているよう。そんな魔理沙の疑問に対して霊夢は... まるで当たり前であるようにその言葉を紡ぐ。

「何言ってるんの魔理沙... 馬鹿兄貴は負けないわ。仮にも私の兄なのよ?」

「... お、おう...」

その自信はどっから来るんだ... というような顔を浮かべる魔理沙だが... すぐに視線は霊華のほうへ映した。なんだかんだ言っ

も一応気になってはいるのだ。

——ここで霊華が初めて動く——

——そして、終わった。

「はあ!？」

「え?」

「フン、だから言ったじゃない。負けないうって」

どうなったのかを大ざっぱに伝えると——まず霊華が初めてフランに攻撃を仕掛ける。それはフランの正面から来てたのでフランは防御の体制を取りつつ攻撃を仕掛けに行く。かと思えばいつの間にか霊華はフランの背後にいて、指先をフランの首筋に当てる。すると突然フランが気絶し地面に倒れる…。のを霊華がキャッチ。

これらが約1秒以内で行われたのだ。何が起こったのだろう、となるのは仕方ない。

「ま、まさかフランは…!!!」

「安心しなさい、死んでないわ。気絶しただけよ。気になるなら行ってみたら?」

「フランっ!!!」

レミリアはそのままそこへ飛んでいく。霊夢はそれを見て、もはやあれは音速に近いのではないか、なんてことを呑気に考えていた。霊夢自身は音速なんてものは見たことはないらしいが。

「…なあ、いいのか?行かせても」

「フランってやつが無事なら攻撃はしないでしょ…。するなら容赦しないけど」

「おおこわいこわい……………ってか、さっきのお前の兄貴がやった

やつ。何をしたか分かるのか？」

「あれは『千鳥』ね。対妖怪束縛奥義……みたいな感じだったわ。相手の妖力に応じて威力が上がるんだとか」

「はー……そんなのあるんだな」

霊夢の解説はあながち間違いではないが、そこに軽く付け加えをしよう。

何をするかだが……まず霊華の持つ霊力を指先に集中させる。そこを相手の首に当てる。それだけ。

謂わばスタンガンのようなものだ。そこに相手の妖力の量に応じて威力が上がるのだが……ここでも相手の妖怪の強さが関わってくる。

妖力のコントロールが出来る妖怪にはこの手の技は通じないことが多い。いくら量が多くても表面に出さなければあまり効果はないからだ。対してフランはまだコントロールは出来ず闇雲に溢れさせてるだけ。まさに『千鳥』の格好な餌だったのだ。

「ま、先代様が使ってたものだしね。馬鹿兄貴の師匠は先代様だし、伝授したんじゃない？」

「え、そうだったのか!？」

「え、知らなかったの?……って、あら?」

そんな会話を続けていると……いつの間にか空模様が元に戻っている。もうすぐ夜が開けるという時間に差し掛かっていた。

紅魔館が倒壊したことで霧の発生源が壊れたのか。それとも元凶の妹のフランが殺されるのかと勘違いして霧に回してた妖力を自分に戻したのか。何にせよ、いつの間にか異変は解決してしまっていたのだ。

「なーんか物足りないよな」

「ま、解決したんだしいんじやない? さっさと馬鹿兄貴連れて帰るわよ」

「……………なあ霊夢。私の見間違いじゃなけりやだが……………お前の兄貴、左腕消えてないか? てか血の跡っぽいのも見えなくもないん

だが」

「……………はっ。」

「怖っ！今の怖っ！ってか自分の目で見てみるよ！」

「っ！！——おに… 馬鹿兄貴い!!!」

「… はあ、私も行くか。霊夢のストッパーとして…。」

喧嘩十五回目

今、俺はある山の山頂付近のなんか開けた場所にいる。ここはそれなりに酸素が薄いらしくてな、身体を鍛えるには最適な場所となっている。神社から割と近いところだから来ようと思えばいつでも来れるとこだ。

んでな、なんでこんなところにいるかっていったらだが…単純、鍛えに来たんだ。ついこないだ事故で左腕が丸ごと無くなっちゃまったわけだな。左腕無し我的生活とか戦闘とかに慣れるためにこうやって身体をいじめにきたんだ。にしても——

「身体のバランスが滅茶苦茶取りづらいな…誤差の範囲内だが」

腕の有り難さがとてつもなく分かる今日この頃。走るのとか殴る、蹴るの姿勢を取るのにも割と一苦労してる。すぐ直せそうだがな。

それに両手で打つタイプの技があるからな…せめて義手は欲しいかもだ。だが金がない。やはり世の中金だな…全く。

「能力も十分に発揮出来ないしなあ…」

眩きながら俺は身体をいじめ続ける。短距離を全速力で走るのを休憩無しで繰り返したり、そこらにある木々を薙ぎ倒したり、崖から飛び降りてみたり…と、色々やってる。ちゃんと木々は苗木買って木倒した後埋めてるから実質±0…のはず。

そんな感じで鍛練を続けてると——空のほうから気配を感じた。

「…魔理沙か？」

「え、なんで分かったんだ？ちよつとキモいぞ」

「霊力を持ってたから人間。魔力も持ってたから魔法が使える可能性がある。そして空からやってくる…こんなの俺の知り合いには魔理沙ぐらいしかいないんでな」

「はえー…流石だな」

「まだまだ甘いと師匠には言われてたんだがねえ」

鍛練を一時的に止め、魔理沙と雑談をする。時折視線が左腕のほう

に移るが特に気にしないでおくか。

「そーいや霊夢はどうしてるんだ？」

「まだ寝てるだろうよ。昨日の異変は朝まで続いたようなもんだしな」

「…？ちよい待てよ、まさかお前…寝ないで鍛練に来てるのか？」

「？そーのだが…」

「……………」

…なんか険しい顔してやがる。いや、一刻も早くこの状態に慣れとかないと不味いからな？

「…らしくない」

「は？」

「らしくないぞ…今のお前」

「…そーうか？」

「そーうさ。私の知ってるお前は霊夢と少し似て面倒くさがり屋だ。確かに里での仕事とか異変とかでは割と真面目で少し…カッコイいが、基本は明日やれることは明日するみたいなスタンスなはずだろ？私は知ってるぞ？修行だってそーうだった。最低限のことしかしてなかったはずだ」

「…」

「なあ、何を焦ってるんだ？正直、片腕無くなった程度でかなり弱くなったわけじゃあないだろ？」

…バレテラ。だが一つ解せないところがあるな…俺が焦ってるだど？いやいやそんなはずはない。仮にそーうだと何に対してだ？

「…なあ、霊華にい」

「!!…久しぶりだな。魔理沙が俺の名を呼ぶのは」

「そ、そーうかあ？」

若干頬を赤くした魔理沙が頭を掻きながら言う。そーいや…いつだったか。魔理沙が俺の名を呼ばなくなったのは。小さい頃は呼んでくれてたんだがなあ…いつの日か呼ばなくなった理由聞いたら逃げられたし…何でなんだろうな。

「オホンッ… まあ、霊華にいが結構重要な役に就いてることは知ってるさ。担当がスペルカード遊ルール戯じゃなくて戦闘殺し合いだもん… だけどな？それを一人でやる必要なんて無いんだって思うんだ」
「… というと？」

「ほら、異変解決の時だつてさ、霊夢と一緒に私も参加したぜ？流石にあの人食い妖怪の時はアレだったが…」

「霧の異変のやつな。あれは屋敷に辿り着くまでしか見てなかったが… 確かに協力しあつてたな」

「そうだろ？博麗の巫女とは言うが言つちやえばガキなのさ。私もだぜ？魔法使いではあるがまだ人生経験の浅いガキだ… だから、その異変で自分の魔法のレベルの低さに気付かされちゃった」

「… ほう」

「これは自分より経験豊富の魔法使いに出会った、という解釈でいいのか？とまあ、とりあえず聞き続けるか。」

「要は、まだ一人じゃ何も出来ない子供なのさ。霊夢も私も… ついでに霊華にいもだ」

「俺も？」

「霊華にいは… 仕事も出来るし家事も出来る。けどな、一人じゃこなせないだろ？」

「… そうなのか？… まあ、そうなのかもな。つてか、結局魔理沙の言いたいことは何なんだ？」

「あー… その、なんだ… 誰かを頼れよ。なんでも一人でやるんじゃないくてさ。その、戦闘だつてよ？後方支援程度なら私でも出来るぜ？家事だつてよ… たまにだが料理作ってくれたりするじゃないか、今度は私がやるよ。伊達に独り暮らしはしてないぜ？… な？だからさ…」

「… フフツ、マジか… あの魔理沙が！こんなにしおらしく！」

「プツ、アツハハハハ!!」

「な、何で笑うんだよ!？」

「いやだつて… 魔理沙だつてらしくないじゃないか！」

「わ、分かつてるさ！… 分かつてる…」

「それにな、俺はそんなに柔じゃないぞ？」

大抵のことは出来ると自負してる。これは慢心なんかじゃなくて客観的な事実だ。師匠が言ってたから間違いない。師匠は絶対だからな。

途中から言葉が支離滅裂になってたりしたのがなんとなく俺の力になりたいということだけは分かった。

ってもなあ… 既に魔理沙には割と助けてもらってるし… 霊夢の良き親友になってくれてるしな。

「ま、その時が来たら存分に頼るぞ？俺は効率が悪いのは嫌いだからな」

「あ、ああ！いつでも待ってるぜ！」

「おーおー、元気の良いことで… さて、そろそろ戻るかね。今日は宴会だろう？魔理沙も何か準備してきたらどうだ？」

「あ、ヤベそうだった… なんか持ってこないと霊夢がうるさいからなあ…」

「ハツハツハ、確かに。俺も俺で料理とかしにやならんからな。作らない癖して味にはうるさい面もあるしな」

「ああ、確かにうるさそうだもんな。あいつ」

こうやって雑談を繰り広げていると、ふいに魔理沙が箒で空に浮き始めた。

「んじゃ、私はそろそろ行く。霊華にいま早めに戻れよ！」

「分かってるって。んじゃ、またな」

「おう！とびつきりのものを用意してやるぜ！」

そう言うのと魔理沙は超特急で自分の家の方向へと飛んでいった。相変わらず早いなおい。

…さて――

「――そろそろ、アレを貰いに行ってもいい頃だよな」

片腕を失った今、前みたいな戦闘はやれない。つまり戦闘時間は短い方がいい。なら切り札を一枚切る必要がある。俺の奥義の中でも

圧倒的火力を誇るあの技…『神雷』のな。

師匠から危険性大だからいざというときにしか使うなって言われたが別にいいだろ。そこは神雷に必要なアレを預かってるあの人もきつと分かってくれるはずだ。

「久々か、香霖堂に行くのは」

そう呟きつつ、俺はその方向へと歩を進め出した。